The Human Science Research Bulletin
2009, No. 8, 197-209

日本の昔話における妊娠と出産
―― 葛藤の内包に関する一考察 ――

児童学科　高橋裕子

要約：家族観が変化し，子どもを持つことへの価値観も多様化してきている。妊娠・出産までの過程が親子関係に影響を与えることは，様々な研究によって指摘されているが，本稿では，日本の昔話に描かれる妊娠・出産をめぐる夫婦の心理的過程および親子関係について，葛藤内包性という概念を手がかりに検討することを目的とする。

キーワード：妊娠，出産，日本の昔話，想像の赤ん坊，葛藤内包

Ⅰ．はじめに

家族観の多様化に伴い，妊娠・出産に対する意識や平均出産年齢，生まれる子どもの数などが近年明らかに変化してきている。子どもを授かるというよりも作るという表現が日常会話で多用され，子どもを持つことへの価値観も変容してきている。妊娠・出産までの過程が出生後の親子関係に影響を与えることは様々な研究によって指摘されているが，それらの過程は伝統的にどのような特徴を持ち，人々はどのように親となる道のりを歩んできたのであろうか。本稿では，日本の昔話に描かれる妊娠・出産をめぐる夫婦の心理的過程について検討し，臨床的現象との比較および考察を行うことを目的とする。

Ⅱ．内　容

1. 妊娠・出産体験

生殖医療技術が高度に発展した現在においても，妊娠・出産には未だ人間の力の及ばず，神秘に近い領域が残されている。子孫を残すという生物学的な側面，一個人としての「私」に「親」という役割が付加される社会的な側面，妊娠期間中を通して体験する他に類をみない身体的変化という身体的側面，そして我が子を持つことで得られる様々な気づきという心理的側面，というように妊娠・出産は人間にとって重層的な意味を持つ経験である。それらについて多くの人々は直接体験する以前に何らかの情報を得る機会があり，それぞれ妊娠から出産に至るイメージを持っている。このイメージが妊娠・出産体験に対する感情に影響を与え，各個人における意味づけや価値の程度を決定していくと考えられる。

レボヴィッシは，母親の心の中には2種類の赤ん坊に対する表象があるとして，母親と子どもとの心理的な関係が，母親の生育過程の中で既に開始されていることを指摘した。ひとつは女性が自身の母親と同一化している幼少期に抱かれる幻想の乳児（fantasmatic infant）で，エディプス状況の中で母親と同一化し，自分の父親と自分との間に生まれることを願う赤ん坊である。もうひとつは，子どもを得られる年齢に達し，自分が産むであろう赤ん坊について様々な空想をめぐらせ，時には名前をつけたり，話しかけたりもする想像の赤ん坊（imaginary baby）である。妊娠中お

よび出産後，母親は現実の胎児や赤ん坊（actual baby）に対し，この想像の赤ん坊と幻想の乳児を投影するため，投影された赤ん坊表象と現実の赤ん坊，またはその両者と自身の生育史上の出来事の結びつきの理解や現実検討に歪みが生じると，母子関係に困難が生じると考えられている。

現実となった妊娠・出産には妊婦のみならず周囲の人々の幻想の乳児，想像の赤ん坊，そして個人的な期待が向けられて，心理的な過程はより複雑化している。しかし，それらが関わる人々の想像に近い水準で満たされる時，妊娠・出産は個人的にも社会的にも充足感と高い価値を与えられる。では，これらのイメージにそぐわないことがあった時にどのようなことが起こるのであろうか。

2. 葛藤の生じる過程

妊娠・出産は一時的体験であり，時間の経過に従って過去の出来事になって行く。そのため，時間経過とともに体験の重みや意味づけは変化して行く可能性を持ち，出産の結果としての子どもの養育がどのように感じられ，またどのように進められているかという現実が時間を遡って妊娠・出産体験の記憶に影響を与える。そのため，周産期において何らかの困難が生じ，心理的援助が行われる場合，妊娠・出産やそれ以前の自身の生育史に対する気づきと意味づけの変化が目的とされる。

障害児を出産した際に親がその障害を受け容れていく過程について，ドローターは①ショック，②否定，③悲哀・怒り・不安，④適応，⑤再起，と模式的な5段階の区分を行った。これは，生まれた子どもについての障害受容に限らず，先に述べた投影された赤ん坊表象および出産体験とその結果としての現実の赤ん坊との違いを受容していく経過であるとも考えられる。この時，心の中の表象と現実との隔たりが大きいほど母親の葛藤は大きくなり，表象へのこだわりが強いほどこの過程からは抜け出しにくくなる。即ち，内的表象を包含する妊娠・出産に関するイメージの変更とそれを踏まえた現実適応がなされたときに受容が成立したと見なすことができ，その際，妊娠・出産イメージの喪失を許容し，手放していくイメージへの喪の作業（mourning work）が必ず行われている。ただし，この受容という心的作業は，親子間で相互に繰り返し生涯にわたって行われていくものであり，一旦成立すれば人生を通じて効力を持つわけではないと考えられる。

3. 物語における不妊・妊娠・出産

古くから日本に伝わる昔話は特定の個人によって創られたものではなく，日本各地で口承によって受け継がれてきている。口伝えによって伝播したため，地方や語る人の生活環境になじみのある形に細部が変更されていることが多いとされているが，恒常性の高い部分は他民族の昔話とも共通点があり，昔話の類型と呼ばれ，このような日本の昔話の類型は600を下らず，なかには同じ種類の話だけで100を超えるものもあると言われている。典型的な日本の昔話がまとめられた179話の資料の中から妊娠・出産およびそれに類する場面が描かれ，子どもを授かる物語を表1にまとめた。表に示した10話のうち，夫婦のもとに子どもが生まれる話が8話，個人（爺と小僧）のもとに子どもが出てくる話が2話あり，夫婦が子どもを得た8話を本稿の素材とする。

これらの物語の特徴をまとめると，以下のような点が挙げられる。

(1) 夫婦の年齢

8話中6話において生まれてくる子どもの両親が「爺と婆」と表記されている。『たにし長者』の「40歳を超えた」百姓夫婦を加えると，7話において年齢的には自然妊娠で子どもを持つことが困難な夫婦のもとに子どもが誕生し，物語の主人公となっていくことがわかる。残り2話は「仲の良い夫婦」とのみ記されている『一寸法師』と「親爺と嬶」と呼ばれている『笛吹聟』で，これ

表1　日本の昔話における妊娠・出産の概要

物語名	夫婦	出産状況	生まれた子ども	誕生後
① 五分次郎	何不自由のない爺さんと婆さん	観音様に願掛け。7日目に婆さんの左手の親指が膨れてきた。7日ごとにお詣りしておしまいの7日目に左手親指から誕生	丈が五分しかない小さな男の子	いつまでも大きくならない 川遊びで大鯛に飲まれるが、助けられて家に戻る。 その後鬼退治に出て宝物を得て親孝行する
② 一寸法師	仲の良い夫婦	住吉様に「指先ほどの小さい児でよいから」と拝む。十月目に男児出産	指の先くらいの男児	いくらたっても大きくならなかったため、家を追い出されて都に上がる。寄宿先のお姫様を襲った鬼を追い払い、打出の小槌によって成人となる
③ たにし長者	40歳を超えた夫婦 貧乏な百姓	水神様に「わが子と名のつくものなら、かえるでもたにしでもよい」と願掛け⇒突然の腹痛から出産	たにし	生まれてから20年たったけれども大きくならず、口をきかない 父の代わりに年貢を納めに行った長者の娘を嫁にもらい、商いが成功して「たにし長者」と呼ばれ、栄える
④ 笛吹聟	暮らしの良い親爺・嬶	清水の観音様に願掛け。21日籠り、夢を見る ここな月にもなると男の子が生まれた	男の子 本家により玉太郎と命名	笛の名手となり、笛の音を聞いた天竺の月の神様の娘と結婚。鬼に連れ去られた妻を月の力を借りて助け出し、子どもも生まれて栄える
⑤ こんび太郎	とほうもない不精な爺と婆	「どうせこの年では童のできるわけもない」とからだ中のこんび（垢）を落とすとそれで童を作った	こんび太郎と命名される	大喰いでどんどん育つ。ある日力業の修業に出て、御堂こ太郎と石こ太郎を力比べで負かし、家来にする。化け物を退治して助けた娘達とそれぞれが結婚
⑥ 桃太郎 桃の子太郎	爺と婆 洗濯、薪とり	川を流れてきた桃を戸棚にしまっておき、二人で食べるために切ろうとした時桃が割れた	男の子 桃太郎と命名	すくすく育ち、鬼退治に出ることを決意。黍団子を持って、犬、猿、雉を家来にして鬼が島に渡り、鬼を退治する。宝物を持ち帰り、天子様からも褒美をもらい、両親を安楽に暮らさせる
⑦ 蛇むすこ	爺さんと婆さん いつも子どもがほしいと思っていた	爺さんが山へ芝刈りに行った留守におなかへぼろ着物をつめて「腹がでっかくなりがしたに」と喜ばせた	蛇が生まれた しずおと命名し、かわいがる	人目につくので山に捨てに行った⇒人喰いとなり、夫婦が行くと首を差し出す 殿さまに首を持って行き、褒美をもらう
⑧ 瓜姫	爺さまと婆さま	ある年胡瓜をまいたところ、むだ花ばかりであった ⇒ずば抜けて大きな成り花から大きな胡瓜がなり、生まれる	太った女の子 瓜姫と命名	機織の名手に成長するが、ある日天邪鬼にとりつかれて命を落とす。その後、遺体は長いふくべに変わった 葉一枚ごとに胡瓜が一本ずつなるようになった

らについては年齢の記載はないが，いずれも「十月目」，「ここな月」に出産に至ったとされていることから妊娠・出産可能な年齢の夫婦であったことが推察される。

(2) 夫婦の生活状況

経済的に恵まれた状況にある夫婦は『五分次郎』と『笛吹き聟』の2組であり，「何も不自由はなかった」「よい竈（かまど）（暮しのよい）の」と説明されている。『たにし長者』と『こんび太郎』の2組の夫婦はともに貧しく，前者は長者の名子（小作人）であるものの貧乏だとの記載がある。その他4組の夫婦の暮らし向きの詳細は記されていないが，『桃太郎』では婆が洗濯，爺が薪ひろい，『蛇むすこ』では爺が柴刈りをしていたことが記されている。

(3) 出産への願い

8話中6話の夫婦が子どもを欲しがり，そのうち4つの物語の冒頭で神に祈願する場面が描かれている。『たにし長者』では「夜になるといつも二人は子供のないのをなげいて」おり，「わが子と名のつくものなら，かえるでもよい，たにしでもよい」と水神様にお詣りして願をかける。『一寸法師』では「たとえ指先ほどの子どもでもほしいほしいと思って」住吉さまに祈願する。

『五分次郎』と『笛吹聟』ではいずれも観音様に願掛けを行っている。『五分次郎』では婆さんが爺さんに「子供が一人あれば，われたちはどんなにしあわせかわからんがの」と言い，「わしもそう思う」と二人で観音さまに願をかけることとなる。『笛吹聟』では親爺が願掛けを提案して本家が食料や移動用の馬を与えて援助し，21日間夫婦が籠りの業を行う。21日目に夫婦が同じ内容の夢を見て，その通りのことが実現して出産に至る。前者では妻が夫に，後者においては夫が妻に働きかけている点が異なっている。

『こんび太郎』では「どうせ，この年では童のできるわけもない」と子どもを持つことへの諦念が語られているが，「とほうもない不精な爺と婆」であるにもかかわらず，体中のこんびを落とし，人形を作る労を厭う様子は見られない。『蛇むすこ』の婆はぼろ着物をお腹にたくさんつめて妊婦姿をすることで爺を喜ばせていたとあり，子どもを持つことを諦めきれず，夫婦共に疑似体験によって代理満足を得る姿が描かれている。

『桃太郎』と『瓜姫』の2組の夫婦に子どもはいなかったようであるが，出産や子どもを持つことへの願望は全く語られていない。夫婦が挙児の希望を語っていないことと関係があると考えられるが，この2話については夫婦の身近な植物の実から突然子どもが生まれている。

(4) 出産の形態

① 通常の出産形態

満期自然分娩だと見なされるのは『一寸法師』と『笛吹聟』の2話，『蛇むすこ』は想像上の妊娠であったが，出産に至っている。『笛吹聟』には「あんばいが悪くなった」と悪阻ではないかと推測される記述があり，8話中唯一妊娠期間中の母親の様子に触れられている。そして「ここな月」に出産に至ったとされている。『一寸法師』では「指の先くらいの男児」という超低体重児が出生しているものの，母子ともに特記されている内容はない。『たにし長者』では願掛けの間に腹痛に見舞われ，しばらくして出産に至っていることから，願いが即座に水神によってかなえられた結果としての出産である。『蛇むすこ』は，おなかにぼろ着物をつめた擬似妊娠であった「ところが，ほんとうに子供がうまれました」と，願望が奇跡的に実現する形での出産であった。

② 通常外の出産形態

通常の出産ではないものの，人間の身体または身体由来の物質から生まれた物語は2話あり，『五分次郎』では，願掛けの7日目に左手の親指が膨れて来て「つぎの七日，つぎの七日とまい日

日参しましたが，おしまいの七日目に婆さんの指から」生まれたと古事記や日本書紀，諸外国の神話にも認められるような出産形態がとられている。他方，『こんび太郎』は不精な爺と婆の体中からこんび（垢）が「茸みたいにえらく落ち」，「童の人形」を作ったものが育っている。

人間の身体以外から子どもが生まれたのは『桃太郎』と『瓜姫』の2話であるが，前者は婆が洗濯に行った川を流れてきた桃を爺と食べるために切ろうとしたところ，桃が割れて生まれている。後者は爺婆がまいた胡瓜のうち，目立って太い茎にむだ花ばかりをつけた苗があり，ずば抜けて大きな成り花が初めて一つついた後，種をとるために黄色に熟すまで待った実から生まれている。いずれも身近な食用の植物の実が熟した頃に実が割れて生まれ出ていることから，象徴的な出産が描き出されていると言える。

(5) 生まれた子ども

8話中7話で男児，1話に女児が出生している。ただし，男児誕生7話のうちの『たにし長者』はたにし，『蛇むすこ』は蛇，と人間以外の姿をした子どもが生まれている。唯一女児が誕生している『瓜姫』では，物語の途中で主人公の瓜姫が死亡し，その後人間以外の姿に変化する点も含めて他の物語とは異なっている。

物語の終結まで動物のままであった『蛇むすこ』を除き，出生した子どもは『一寸法師』と『五分次郎』の2話で非常に小さく，標準的乳児であったと推測されるものは『桃太郎』『こんび太郎』『笛吹き聟』の3話である。『一寸法師』『たにし息子』の2話は物語の後半で平均的な発達水準に相当する青年の姿に変化を遂げている。

(6) 名づけ

子どもに名前をつけることは，想像の赤ん坊と現実の赤ん坊とを内的に統合していく意味を持つが，8話中5話は子どもの誕生に両親が立ち会い，即座に名前をつけている。『五分次郎』と『一寸法師』は背丈から「五分次郎」「一寸法師」と名づけられた。『桃太郎』と『瓜姫』は生まれ出た実から名前がつけられ，『蛇むすこ』では由来は定かではないが「しずお」と名づけたとされている。『こんび太郎』では，童の人形に名前をつけたとする次には成長の様が語られており，名づけることによって生命を持った人間に変化したかのようである。『笛吹聟』では親爺が本家に行って尋ねるという家父長制に則った命名の様子が描かれ，「玉どもない，星どもない，ありがたいわらし」であるため「玉太郎」と名づけるよう教えられ，名前が決められた。子どもに関する社会的な出来事には本家が親役割を担っているといえよう。

『たにし長者』は8話中唯一主人公となった子どもに名づけられた経過が描かれず，「たにし」あるいは「たにし息子」と呼ばれている。長じて人間の姿となっても，「たにし長者」と呼ばれるに至っては，「たにし」が名前以上に主人公を表象する役割を果たし，単に姿かたちを表していたものから，人となりやその生き方を示す意味付けに転換していったと考えられる。

(7) 両親との関係

『五分次郎』，『一寸法師』，『たにし長者』，『桃太郎』，『瓜姫』の5話においては，両親が「大事に」「大切に」「めごがって」「かわいがって」と子どもを慈しみ，育てた表現がなされている。『こんび太郎』，『笛吹聟』においては主に物質的な豊かさの与えられたことが詳細に物語られており，『こんび太郎』には貧しいながらふんだんに食物が与えられ，修業に出る際に望んだ百貫目の金棒を両親が「あるかなしかの財布の底をはたいて」与えたとされている。『笛吹聟』では「神さまの申し子」として育てられ，中でも得意の笛を「二挺も三挺もいいのを買ってもらって」吹き暮らしたとある。ただし，この玉太郎のみは8話中

唯一，物語の中で両親と死別しており，15歳で父，17歳で母を亡くし，その後は本家の世話になって暮らすこととなる。親役割が育ての親から家父長制による社会的な親へと交代しており，実父母との関係は，文字通り“生みの親”としてのつながりが大きく，社会的な成長には“育ての親”が当たることになったと解釈することができる。また，物語の後半で天の国から下の国に戻ってきたときに出会う「六十ばかりの爺婆」も玉太郎の身を案じており，最後には嫁の親に当たる月の神さまに危機から救われるなど，良い親役割を果たす存在には終始恵まれている。

Ⅲ．考　察

1．子どもを授かるまでの心理的過程

(1) 願望による葛藤の発生

本稿で取り上げた物語には，子どもを産み，育てることを望みながらもそれが思い通りにかなわない人々の心情の一端が語られている。子どもを産み，育てることに関して出産は通過点に過ぎないはずであるが，子どもを授かることを願っている間はそれが人生の究極の目標であるかのように感じられる場合が少なからずあり，現代において不妊に悩む人々にも頻繁に同様なこころの在りようが認められる。

① 葛藤への対処としての神仏への帰依

子どもを望むが授からないという事態は，自らの努力だけではいかんともしがたいことであるだけに，願望を持ち続ける限りは葛藤が続く。物語の冒頭で子どもを授かりたいと願った6組の夫婦のこの葛藤に向かう態度は様々であり，4話において語られていた神仏に帰依する選択は葛藤への対処方法として現代でも日常的に認められる。いわば問題解決を一旦神仏に委ねて待つ方法である。神仏に願いを託したとしても，願望が消えるわけではなく，葛藤は軽減されるものの，依然葛藤を抱え続けて待つという忍耐が必要となる。この葛藤を内包して待つためには，願いがかなう希望を持てることが必要条件となり，自己や世界への信頼感の度合いが試されるといえる。また，目の前に現れない想像の赤ん坊に一体化している自己の部分的な喪失に耐えるだけのこころの成熟を遂げていることが必要であろう。

② 神仏に帰依しない対処

子どもを望みながら神仏に頼ることのなかった夫婦は『蛇むすこ』と『こんび太郎』の2組である。『蛇むすこ』では，子どもを授かりたい願望をお腹にぼろ着物を詰め込むという外見を真似ることによって乗り越えようとしている。この行動は，一見夫婦間に想像の赤ん坊を共有しようとする試みであるようだが，実は虚偽の現実を共有しているに過ぎない。想像の赤ん坊に親となる夫婦が話しかけたり，名づけたりする行動化は，あくまでそれが幻想であることを前提に行われているため，この『蛇むすこ』における夫婦は，願望というこころの次元の問題を現実の帳尻を合わせることで克服しようとしていると考えられる。こころの内側にある願望や幻想と現実との境界が曖昧で，不全感というこころの次元の問題を直接体験によってのみ充足し，神頼みという他者に委ねて待つことのできない点において，夫婦それぞれの葛藤を内包する力の脆弱性が指摘される。このような特徴をもつ人のこころは現実と内的世界を区別し，葛藤を抱えることのできる人々に比べて成熟の度合いが低く，辻による原体験心性の特徴を持つと言える（表2)。

他方，『こんび太郎』の夫婦は，現実には起こりえない経過で子どもを獲得した5話のうち，唯一人形が子どもに変化した物語でもある。夫婦は妊娠出産年齢を過ぎていることを自覚した上で，願望の象徴であると同時に，各々の分身としての意味付けを持つ身から出たこんびで人形を作成し，幻想の赤ん坊を具現化している。この上なく不精な夫婦が人形を完成させた願いの深さが人形に命を吹き込んだとも解釈できる。

表 2. こころの成熟と原体験心性（未成熟と成熟との対比（辻，2008）の表を一部改変）

未成熟（原体験）側		成熟側
思っているだけの内的世界	⇒	外的現実との関係を心得て、重視する
見えている存在のみ	⇒	見えない実在（こころ）にも気づく
直接性の強い体験様式	⇒	間接化を行うことができ、全体を管理・統制する
融合・合一的な世界	⇒	区別を知り、自分が独立していることを心得る
受け身の世界	⇒	能動・主体性へ
述語が支配し、主導する	⇒	主語が支配し、主導する
葛藤を忌避し、排除する	⇒	葛藤を内包する

(2) 願望の言語化と背景心理

子どもを持つことを強く願う際，『五分次郎』の夫婦のように，幸せであることの条件に子どもの存在が組み込まれている，あるいは家族イメージを完成させるためには子どもがいなくてはならないと考えられている場合もある。また，その願望を言語化する際，使用される語彙の違いはあるものの，「わが子と名のつくものなら，かえるでもよい，たにしでもよいが」と願う『たにし息子』や「指先ほどの小さい児でよい」という『一寸法師』に似た願望の極端な言語化は現在でも珍しくはない。しかしこの時，親となる人の想像の赤ん坊が，かえるやたにし，指先ほどの子どもの姿であることは極めて稀であろう。この表現は望みをかなえられない苦しさを回避しようとする方便であり，異形の子どもの出生を意図している訳ではないと受け取ることが妥当である。他方，人間は意識の外にある内面，即ち無意識を時に表現するということを考えるならば，この願望の表現には，想像の赤ん坊表象を一旦棄却し，どのような子どもであれ，わが子として受け容れようとする現実適応への内的準備が始められているとも解釈できる。

2. 子どもの誕生以降の心理的過程

(1) 誕生時の心理的過程

子どもの誕生時の反応は当然ことながら誕生までの経緯と状況によって左右される。子どもの誕生を願う際，願望の表現が時として極端な言語表現となることを先述したが，その事実そのものは，親にとっては非常に大きな価値を持つ体験であり，出産や子どもに関して例外的な出来事が起きたことは，8話の親子関係の初期の二者関係においては何ら問題視されていない。これは，親になるという事実そのものが重視され，それに付随する心理的過程は当然その事実に合わせて進行すると考えられていたことによると見ることができる。子どもがどのような姿であり，いかなる経緯で誕生しようと，夫婦の元にもたらされた以上，深く葛藤することなく受容するのが当然であるとされているのである。これは，親の姿としての理想像であり，一般的な事実とは必ずしも一致しない。以下，更に詳細に出産後の経過と親子関係について考察する。

① 通常の出産形態

普通分娩での出産だと考えられる『一寸法師』と『笛吹聟』の2話においては，一寸法師は「指先ほどの小さい児でよい」と親が神に願った通りの姿で出生し，誕生時点での両親の反応は特に語られていない。『笛吹聟』は両親という生みの親の上位に更に本家という親役割が存在する二重構造の中で生まれている。誕生はいずれの親からも非常に喜ばれ，出生までの経過が籠りの業を行う中で見た夢のお告げ通りであることから，出産後は「神の申し子」と見なされている。この神格化は，その生育過程から『たにし息子』のように思いがけない姿で出生した子どもを受容するための

防衛機制ではなく，神仏の采配どおりの事実が起きたことへの畏敬の念という意味合いが強いと考えられる。

② 通常外の出産形態

子どもの姿がたにしと蛇であった『たにし長者』と『蛇むすこ』では，まず驚きが表出されるが，前者では「みんなびっくり」したが，「水神様の申し子だからといって…神棚に上げて，大切に育てました」と神聖化することによって子どもが異形であることを受け容れようとしている。このような合理化は，葛藤を軽減するための無意識的努力であると意味づけることもできるが，元々，「わが子と名のつくものなら，…たにしでもよい」と何度も願っていたことから，願いが文字通りにかなったため，不服を感じても言語化できない，あるいは神からの授かりものとして不服に思うことすらなかったとも考えられる。他方，『蛇むすこ』では，両親は子どもの姿に驚くものの，「何かの因果だとあきらめて，蛇の子を大事に育てた」と驚きの後にすぐあきらめが生じている。これは，ドローターの5段階のいずれにも含まれない反応であり，生起した事実に受け身であることによって葛藤を回避する原体験心性がここにも表れている。

植物の実から子どもが生まれた『桃太郎』と『瓜姫』において，前者は「大さわぎした」とあるが，後者では感情的な反応は何も語られていない。しかし，両者ともに生まれた実にちなんだ名前を子どもにつけて可愛がって育てており，出生の経緯が子どもを受け容れる上での障害になっている様子はうかがわれない。同様に，通常の出産形態ではなく親指から生まれた『五分次郎』と夫婦がこんびを落として作った『こんび太郎』でも同様に，「背丈が五分ばかりしかないので」五分次郎，こんびからできたためにこんび太郎，と命名されていることから，この場合も子どもの身長や出生の経緯が両親にとって最もこの子どもを表すにふさわしいと感じられ，その特徴を名に冠したことが推察される。これら4話においては，子どもを持つという願望の実現，あるいは思いがけず親になるという事実による個人的喜びが大きいあまり，子どもの誕生の経緯が一般的でないという社会的次元の問題は不問にされていると見ることができる。

(2) 誕生時の心理的過程における背景要因

8話に登場する夫婦は，果たして想像の赤ん坊をどのようにイメージしていたのであろうか。どの両親も妊娠・出産の過程に起こる出来事に驚くことはあっても，実に柔軟にそれらを受け容れて子どもを育てている。この容易に受容が成立した理由のひとつは，子どもの誕生は夫婦が生きていた証の一端であり，未来に希望をつなぐ意味を持つ心理的に大きな出来事であったからであろう。また，現在ほど高齢者に対する社会福祉制度が整っていなかった社会状況を考えるならば，次世代は現実生活において親が年老いた時の労働や介護などに当たることを期待される存在であり，子どもを持たずに歳をとることは，それなりの覚悟を必要とすることであったからであろうと思われる。

もう一つは両親の年齢である。高齢化社会と称される昨今ではあるが，この物語の舞台となる時代には年齢を重ねた人々は希少で現在よりも高い価値が認められていたと考えられる。現代のように情報獲得や移動の手段が発達していないこの時代には，人生経験を通して集積された知識や知恵が尊重され，尊敬の対象とされた高齢者は，周囲の評価に値する役割を果たしていたように見受けられる。今回取り上げた物語に登場する爺婆と表現される年齢となった夫婦は，季候風土などの自然に左右される生活を送る中で人間の力の及ばぬ経験を重ねた末にわが身に起こることに対して批判や疑問を呈するのではなく，積極的に適応することを心がけていたように見受けられる。その結果，大きな葛藤を生じる妊娠・出産や生まれてきた子ども自身をも自然の采配によるものとして難なくこころの内に抱えることができたのではない

だろうか。

年齢を経ることが葛藤を内包し，こころの成熟度を増すことにつながる一方で，年齢を重ねることが必ずしもこころの成熟につながっていないと考えられる夫婦が登場する物語もある。本稿で取り扱った物語には登場していないが，日本の昔話には意地悪爺さんや意地悪ばあさんが欲深い行いからひどい目にあったり，人真似をして懲らしめられたりする例もあることから，全ての老人が尊敬に値するとは限らないことが物語の世界に描かれている。この点においては，人間の在りようは今も昔も変わらないと言える。

こころの成熟は身体の成熟とは異なり，自然に任せていて進むことばかりではない。外界の出来事を歪みなく捉え，周囲の人々との関係の中で独立した個としての能動性を機能させることがこころの成熟を進める上では重要であり，何よりも自らがこころを持った存在であることを意識化できている必要がある。こころの成熟を獲得するためには，こころに注意が向けられていなくてはならないのである。そして，自らの体験を振り返ることによって洞察を得て，さらにその洞察をもとに経験をまとめ返すことが葛藤を抱える力へとつながっている。

(3) 子どもの成長に伴う心理的変化

物語には詳述されていなかったが，妊娠中や出産時の親の感情体験が後に子どもとの関係に投影されていくことが臨床的な事実として広く観察されている。それらの時期に体験された感情は，親が子どもの存在に伴って起こる出来事にどのように対応していくかに影響を与え，親子の関係形成がなされていくと考えられる。

8話中子どもの成長過程における親子関係に明らかな心理的葛藤や危機的状況が発生したものは，『たにし長者』と『蛇むすこ』の2話のみである。『笛吹聟』のように両親と死別してしまった場合を除き，『たにし長者』，『桃太郎』，『五分次郎』，『こんぴ太郎』の4話では親孝行が結末となり，『蛇むすこ』と『瓜姫』でも子どもが直接親孝行をすることはなかったが，子どもの死によって両親に金品がもたらされる結果となっている。『一寸法師』においては，両親と離れた場所で物語が終焉することもあって親元を離れた以降の親子関係については触れられていない。

① 転機としての親子関係における葛藤

誕生時に子どもの姿が異形であった『たにし息子』では，たにしの姿をした息子に対して一見成立したかに見えた受容が20年目に揺らぎ，再び息子を受け容れなおす経過が物語の半ばに語られる。この事実から遡って考えるならば，当初，父親は奇跡的に子どもを授かったことを驚き，喜びはしたものの，内心子どもの姿がたにしであったことには失望していたと考えられる。しかし，「水神様の申し子」であると合理化して，失望を否認しつつ20年を過ごしたと言える。しかし，たにしの姿をした子どもを持った場合に当然誰しも抱くであろう感情が，初めて「たにしの息子であってみれば，何の役にも立たない。われはこうして一生働いて，女房や子どもを養わねばなるまい」と行く末を憂う言葉となって表出された時，たにしも長い引きこもりからの脱出に至る。これは，たにし息子の父親が，現実の息子の姿を覆い隠すために作り出した「水神様の申し子」という謂わば想像の赤ん坊を手放し，目の前に在る現実の赤ん坊＝息子を認めた瞬間であると捉えられ，ドローターの理論による第2段階の悲しみ・怒り・不安と第4段階の抑うつが混在しているように見受けられる。いずれにしても，目の前の子どもの姿を親がありのままに認め，それについての自らの感情の洞察に至ったことと同期して子どもに大きな変化が生じることは，心理臨床において観察される事実と一致する。

② 親子関係における葛藤の否認・回避

『蛇むすこ』においては，子捨てと子殺しという2回にわたる虐待行為が発生しており，蛇の姿

をした子どもは「大切に育てられた」幼少期を過ぎると「人の目にもとまるように」なったため，両親は相談して仕方なくしずおを「山にすてに」行き，「因果をふくめて帰って来ました」とある。この時，子どもを捨てに行った主語が「婆さんは」であるにも関わらず，因果を含める内容には「爺さんと二人でおまえをすてに来た」と主語が夫婦に変化している点が興味深い。一般に，児童虐待は実母による割合が最も高く，家族機能の特徴として実母による虐待を抑制する父親機能の弱さが指摘されているが，夫婦の合議による苦渋の選択という形態をとりながらも，実母が直接的な実行役割を担っている。

数年後，山を通ると大きな蛇に食い殺されるとのうわさを聞き，両親がわが子であろうと心配していたところ，蛇の首に千両の賞金がかかったことを知り，自分達が殺されることを覚悟の上で「わしら二人に殺されたほうがよかろう」と山に入り，「泣く泣くそのでっかい蛇を殺し」て殿様の「おほめにあずかって千両箱を」もらい，「千両金ほど子はたから」と言われる由来はこのお話であるとの結末となる。

世間体を気にするあまり蛇の姿をした子どもは山に追いやられたが，誕生までの経過に認められた両親の葛藤を排除する機制は子どもの成長過程においても継続している。子どもの養育過程で親は数多くの葛藤にさらされ，徐々にそれに耐えて葛藤を内包すること，即ち育児が親のこころの成熟につながることが少なくないが，この物語の両親は，はたしてどうであろうか。この夫婦にとって，生まれた子どもは，子どもを望みながらもそれがかなわない葛藤を鎮める意味を持つことから「しずお」と名づけられるにふさわしかったが，成長の末，新たな葛藤を生み出すようになり，もはや「しずお」ではなくなった時に排除され，山に捨てられる事となったのであろう。

子殺しを決意した際に自らが殺される覚悟をした点は，親として極限の境地にあったことがうかがわれるが，自らの手で子どもを殺して子どもが行ったことの始末をつけようとする考え方は，子どもを親とは別個の存在として捉えていないからこそできる発想であり，親から子への一体感は相当に強く，文字通り一体であった妊娠中と何ら変わりないように見える。いずれにしても，両親のこころの成熟の度合いが親子の関係のあり方を規定していたと言える。

他方，しずおの側から両親との関係を考えるならば，山に捨てられて成長の後も幼少期の両親との良好な関係のみが意識水準にあり，親に捨てられたことへの怒りは split されて内界から排出されていたようである。人を食い殺す行為は，単なる捕食行動のみならず，この潜在的な攻撃性が他者に向けられていたと見なすことができ，この息子も両親と同じように自身の内面にある葛藤に目を向けることはなく，また親子の間に葛藤が持ち込まれないように無意識的な防衛機制をとっていたと言える。両親も子どももともに葛藤状況を回避しているが，両者の姿から，葛藤を内包する力を育てるためには，幼少期から葛藤は様々な感情とともにこころの中に納めておくことができるということを学習する機会を繰り返し持つことが重要であると言えるのではないだろうか。

③ 親子関係の分離

8話の中で『一寸法師』は，主人公が唯一両親から離れた場所で物語が終わり，子の成長後の親子の関係について語られてはいない。「仲のよい夫婦」のもとに子どもが生まれ，「その生まれた児は小さくて指の先くらいしかなかった。それでも，…かわいがって育てました」とわずかに接続詞に失望感がにじんではいるものの，神仏に祈った言葉どおりの子どもを得たためか感情的な反応は何ら描かれていない。「だが，何時まで経っても大きくならないので，…家を追い出すことにしました」と時間の経過とともに失望が攻撃性の色合いを帯び，「一本の縫い針を刀にしてやって」と武器を与え，子どもを自立させることとなった。

一寸法師自身は「しかたがないので，おふくろに椀と箸ともらって」と予期せぬ自立を促されたことへの傷つきがうかがわれるものの，その事態を受け容れて旅に出ている。都に着いて一寸法師は自らを「親父から追い出されて来たものだ」と自己紹介しており，その傷つきが消失していないようであるが，周囲の人々に「かわいがって」もらい，殊に「お姫様は一寸法師がすきになりました」とあるように家族外に親密な対人関係を築いている。その後，二匹の鬼に出会い，「丸のみ」にされてひねりつぶされそうになるが，目の中に飛び込んで目を突き，鬼が逃げていく。そして，結果的にはその鬼の残していった打出の小槌で背を伸ばし，「立派な一人前の侍」になったという一連の出来事が親元を離れた後の筋立てである。

『桃太郎』や『五分次郎』においては，鬼は鬼が島にいる異質の存在であったが，一寸法師の場合，街中で鬼と遭遇したことを契機に一人前になったことから，この2匹の鬼は一寸法師にとって突然の自立を強いた両親の表象であると考えることができる。一匹の鬼に「丸のみ」にされそうになり，もう一匹にはひねりつぶされそうになる場面は，人並みはずれて小さい子どもを過保護に扱う幼少期の母親像と文字通り心を鬼にして一寸法師を家から「追い出す」父親像であるとも考えられる。子どもを鍛え上げようとはするものの，子どもが使いこなせる大きさの「刀」を持たせてわが身を守れる配慮をしたように，自立を強く促しながらも子どもの身を案じて保護しようとする両親像が，一寸法師には一つのまとまりをもって捉え難かったために物語の最後まで関係を回復し得なかったのではないだろうか。一寸法師にとっては，自身の成長を背丈という視覚的な材料でのみ判断したように感じられた両親＝鬼の目を攻撃し，追い払ってしまった後に残された打出の小槌，即ち表象として再会した両親からの贈り物によって一人前の成長を遂げている。無理を強いられたかのように見えた自立は，結果的に成功に終わってはいるが，両親が子どもに対する自身の両価的な感情を自覚し，表現することができれば一寸法師の内的両親像が相反する面を統合したものとなり，両親と決別したままにはならなかった可能性があると考えられる。

④ 親役割の交代

『笛吹き聟』の玉太郎は，両親や周囲から「神さまの申し子」と見なされ，育てられる。玉太郎は手習いに行ったところ，飛びぬけてよくできたために「友だちどもは…憎がって押しころばしたり，天井さつり上げたりした」といじめに遭い，家で笛ばかり吹いているという内閉的な状態に陥っている。しかし，両親は玉太郎のするに任せており，師匠という親役割の人物が家を訪れて再び手習いに行くように説得する。その後，実の両親は玉太郎が青年期を迎える頃に相次いで亡くなり，生みの親としての役割を終え，育ての親としての本家が実質上の養い手となり，玉太郎の親役割をとる。

笛の音を聴きに訪れた天竺の国の月の神様やその娘との結婚の際も本家が仲立ちをして進めたが，相手が神様の娘であることは本家も玉太郎も知らず，3年後の正月の初礼の際に初めて娘の身分が分かる。しかし，玉太郎は驚きもせず，妻に教えられて天の国に行き，月の神様に何日も笛を吹いて聞かせる。この時「神様の申し子」にふさわしい生活を数日送ったが，天の門につながれていた鬼に望まれるままに土産物を差し出してしまい，鬼が逃げ出して「下の国」にいる妻がさらわれてしまう。試練を与えて玉太郎の成長を促す意味においては，この鬼は親役割の一部であると考えることができるが，地上に降りた鬼は鬼が島に居り，人間の島とは離れたところにいる。

玉太郎はやっとのことで島に着いた際，「六十ばかりの爺と婆」の家に泊めてもらい，玉太郎の身を案じる養育的な親役割の人物が再び登場している。最後に鬼と対決して命を落としそうになった際，妻が月の神様に祈り，命を救われるが，直接対決に勝利して鬼を退治していない点が『桃太

郎』や『五分次郎』『一寸法師』とは異なっている。神格化された玉太郎には，鬼との戦いという試練を克服して自己実現する必要はなかったのかもしれない。この出生前からの神格化は実の両親との関係にも影響を与えており，親密さに欠け，距離感の感じられる面があったように見受けられる。しかし，玉太郎は次々に登場する親役割をとる人々との関係に支えられて成長を遂げ，8話の中で唯一「子供も生れ栄えた」と次世代に関する記述が認められる。

⑤ 親孝行と親からの自立

『桃太郎』，『五分次郎』，『こんび太郎』，『たにし息子』において，主人公は家を出て対人関係を築き，何らかの仕事を成し遂げて再び両親の元に戻っている。宝を得て一生安楽な生活を送る，家が栄えるなど，原家族への回帰によって物語が終結し，唯一『一寸法師』のみが先の項に述べたように家族への回帰を伴わない終わり方をしている。原家族に戻ることが，いわゆる親孝行や幸福な人生として捉えられ，これらの物語においては子どもが親から離れ，自立することは重要な心理的課題であるという視点は認められない。

『蛇むすこ』と『瓜姫』においても子どもの死によって千両の褒美や畑の作物が豊作に転じるなど両親に金品がもたらされており，子どもを育てたことによって物質的に報いられ，子どもからの直接の行為ではないものの，結果的に親孝行がなされたと捉えることができる。

Ⅳ. まとめ

妊娠・出産が人生の選択肢のひとつに位置づけられるようになって久しいが，それらにまつわる葛藤は今昔普遍的な側面があるように思える。文明が進み，人々の生活様式は大きく変化してきているが，人が人を産み，育てることに関わるこころの働きは大きく変わっていないからではないだろうか。核家族化が進むに連れて育児の知識や技術が伝達されにくくなっていることが指摘されているが，知識や技術にとどまらず，子どもを持つことを望んだ時から生じる葛藤への対処や工夫についても伝達されなくなっている点が親子関係に困難を抱える家庭の増加に関係しているのかもしれない。いずれにせよ，8つの昔話から，子どもを持ちたいと願うこと，子どもが授かる過程が，その後の親子関係にいかに大きく影響を与えるかが改めて認識できる。

本稿では主に妊娠・出産とその結果としての親子関係に焦点を当てて考察したが，昔話の中には他にも現実に生きる人々との共通点が多いように思われる。これらについては稿を改めて論じたいと考えている。

引用・参考文献

Balett, J: Will You Be Mother?, Virago, 1994.（「産まない」時代の女たち，遠藤公美恵，とびら社，2004.）

Drotar, D., Baskiewicz, A., Irvin, N., Kennell, J., & Klaus, M..: The Adaptation of Parents to the Birth of an Infant with a Congenital Malformation: A Hypothetical Model, PEDIATRICS, Vol. 56 No. 5, 710−717, 1975.

Guggenbuhl-Craig, A.: Die Narrischen Alten −Betrachtungen uber moderne Mythen−, Schweizer Spiegel Verlag, 1986.（老愚者考−現代の神話についての考察，山中康裕監訳，新曜社，2007.）

石田英一郎：桃太郎の母，講談社，1966.

河合隼雄：紫マンダラ，小学館，2000.

Lebovici, S: Fantasmatic Interaction and Intergenerational Transmission., Infant Mental Health Journal, 9 (1) 1988.（幻想的な相互作用と世代間伝達．精神分析研究 34 (5), 1−6, 1991.）

関敬吾：こぶとり爺さん・かちかち山 −日本の昔ばなし（Ⅰ）−，岩波文庫，1956.

関敬吾：桃太郎・舌きり雀・花さか爺 −日本の昔ばなし（Ⅱ）−，岩波文庫，1956.

関敬吾：一寸法師・さるかに合戦・浦島太郎 −日本昔ばなし（Ⅲ）−，岩波文庫，1957.

辻悟：治療精神医学の実践−こころのホームとアウェイ，創元社，2008.

Pregnancy and Childbirth in Japanese old stories

—— A Study on connotation of complications ——

Osaka Shoin Women's University
Yuko TAKAHASHI

ABSTRACT

The purpose of this paper is to examine psychological processes of couples who experience pregnancy and the birth of child in eight Japanese old stories. This paper reports parents − chil-dren relationships are influenced and prescribed by the styles and extent of parents' conflict connotation.

Keywords: pregnancy, childbirth, Japanese old stories, imaginary baby, conflict connotation